

エコビレッジによる ライフスタイルの 追求と地域再生



坂本 純科 (さかもと じゆんか)

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト理事長

1991年北海道大学農学部卒業。札幌市環境局勤務。04年退職。国際協力やまちづくりのNPO活動を経て、09年から道内にエコビレッジ建設を目指して活動する。北海道工業大学客員准教授。酪農大非常勤講師。

エコビレッジとは何か？

エコビレッジと呼ばれる環境共生型のコミュニティが、欧米を中心に広がっています。現在、世界で15,000か所以上あると言われてはいますが、決して真新しいものではありません。日本も50年もさかのぼれば国中エコビレッジだったと言えるし、今でも第三世界の農山村ではエコビレッジとして存続しているコミュニティも多いでしょう。

私は2006年から08年にかけて英国に滞在し、ヨーロッパ各地のエコビレッジを訪ねました。60～70年代の環境・平和ムーブメントの中で発生したコミュニティもあれば、この10年くらいで様々な新しいタイプも生まれています。

ヒッピー世代のコミュニティ運動はなかなか地域社会に受け入れられず、多くは失敗に終わったものの、そのうちのいくつかは今も姿形を変えて発展的に存続しています。彼らの取り組みは、現代の社会課題に対していくつかの解決策を実践的に示しており、最近では、地方自治体や専門家など主流の人たちにも注目されるようになってきました。

エコビレッジの基本理念と多面的な機能

日本でエコビレッジの取り組みが紹介される時、その焦点はエコ建築や自然エネルギーなど環境テクノロジーという側面に集中する傾向がありますが、エコビレッジの基本理念は環境面にとどまらず、社会性、経済性、そして精神性における持続可能性を視野に留めることに留意する必要があります。それら4本柱は相互に関連しあっていて、上手にバランスをとることがまさに持続可能な社会のキーと言ってもいいでしょう。

もっとも、エコビレッジに厳密な定義や認定制度などはないため、活動の内容は団体や地域によって大きく異なります。どのビレッジも強み弱みを持っており、環境技術に秀でているところ、弱者の自立支援に力を注いでいるところ、それぞれに特徴があります。

たとえば、以前訪ねたフィンランドでは、国全体が

森に囲まれていて、最初はこんな自然の中に「エコビレッジ」なんてわざわざ作る必要があるのかと疑問に思いました。しかしながら、シングルマザーや独居高齢者の自立生活をサポートする福祉的な役割を果たしていることに気づいて感心しました。異年齢、異世代に囲まれた多様な生活空間は、子どもたちの育ちにとっても素晴らしい環境を創っていました。スコットランドにある50年の歴史を持つエコビレッジでは、約400人の住民の生活の場でありながら、世界的な成人教育の場として年間1万人を超える人が滞在しながら学んでいます。出版やエコ建築など40ものコミュニティビジネスを起業して地域経済にも貢献しています。ドイツのあるコミュニティでは、120人のエネルギーをほぼ自給、住居もすべてセルフビルドで、木材や藁などの資材も敷地内でまかなっていました。住民の二酸化炭素排出量はドイツ人平均の3割以下という研究結果が出ています。

エコビレッジの経済と互助システム

エコビレッジにはすべてを共有する共産的なところもありますが、多くは家族単位の経済的自立が原則で、20～30時間程度のボランティアな労働をコミュニティのために提供するという仕組みが一般的なようです。収益のためにレストランやゲストハウスなどを経営しているところもありますが、基本はあくまでも暮らしなので、いわゆる雇用関係に基づいた会社組織のような性質のものではありません。また、伝統的な村社会との違いは、地縁血縁ではなく共通な価値観と対等な人間関係に基づき、意識的に創られていることです。



スコットランド・フィンドホーンのエコビレッジ研修、世界22カ国からの受講者

500人規模のコミュニティでは、美容師や庭師などの経験を活かして仕事としたり、子どもの世話や車の運転、ペットの散歩など日常生活に必要なちょっとした労働で小遣い稼ぎをして生計をたてていました。コミュニティの内外で使える地域通貨の仕組みを導入しているところもありました。

一般的に都市で孤立した消費者は、そのようなサービスを得るためにお金が必要だし、もうけにならない地域ではサービス自体が成立しないのですべて一人でしなくてはなりません。コミュニティを作って住むこと、住民同士が互いに助け合い、意識的に施設や技術をシェアすることで、よりお金のかからない生活が成り立つことがわかります。核家族や一人暮らしがますます増える社会では、このような生活形態のメリットは大きいでしょう。

このようなつながりは社会に埋もれている潜在的な能力を引き出し、安心できるよい人間関係をつくることにもつながります。いろいろな人がゆるやかに結び合うこと、少しの不便や煩わしさをむしろ積極的に学びとすることで、個人や家族単位ではできない、多様で合理的、そして人間的に豊かな暮らしが実現できるのではないのでしょうか。

持続可能な農業への提案

エコビレッジではどこも敷地内に農園を持ち、多少なりとも食料を自給しています。化学肥料や農薬に頼らない自然循環を活かした農法をそれぞれ試行していました。必ずしも農業を収益事業として行っているわけでもなければ、完全な自給自足を目指しているわけでもありません。自分たちで作れるものはできるだけ作る。作れないものは地域でまかなうし、余ったものはスーパーマーケットや直売所、会員などのネットワークで販売する。目指すは地域自足といったところでしょうか。



農作業するボランティア

農村の高齢化はヨーロッパでも同じです。大規模慣行農家では移民の労働者を多く見かけましたが、エコビレッジでは、どこもウーファーと呼ばれるボランティアを受け入れています。彼らは1日6時間程度の農作業をする代わりに宿泊と食事を提供され、コミュニティの労働力不足を補っています。私自身、あちこちのエコビレッジで畑仕事や料理などのボランティアをしながら滞在しました。世界中からやってくる人びとが語学や農業技術を学んだり、異文化交流や共同生活から新たな気づきを得る機会として活用されていました。契約も命令もないのに生き生きと働く人々の姿が強く印象に残っています。

安心安全な食料やエコロジカルな暮らしへの関心が高まる中、消費者が生産現場に近づき、農業を実体験とともに理解することは大変重要です。そのような機会が増えることで、都市と農村、生産者と消費者の関係性も一方的なものから相互に支え合う関係に変わっていくでしょう。また、自分が生きる上で必要な食べ物を自ら作り、みんなで協力して働くことは、とりわけ若者にとって生命を育み他者を思いやる感覚を養う貴重な経験です。農業や農村環境のもつ教育や福祉などの効果を引き出す仕掛けとしても、エコビレッジの可能性は大きいと思います。

地域との関係づくり

オルタナティブ^{*1}を目指す運動が、反発や衝突を産むのは日本だけではありません。私が住んでいた英国ウェールズでは20年余の歳月を経ていまだに地域住民の無理解に悩むコミュニティにも出会いました。一方、対立の時代を経て、社会から一定の信頼を勝ち得ているケースもあります。地域とよい関係を築きあげたコミュニティを見てみると、根気強く情報発信を行っており、何らかの形で経済的、社会的に地域に貢献したことが周囲の人々に認められるようになった歴史を持っています。

北ウェールズのあるカエマボンという小さいコミュニティでは当初非合法に建設した建物について自治体

から撤去を求められていましたが、長年の活動が評価を得て建築許可を獲得しました。数年前に火事で建物が焼けたときは地域住民が寄付を集めて再建に協力してくれたそうです。

同じく北ウェールズのCAT (Centre For Alternative Technology) は、エコビレッジが発展的に方向転換して、ヨーロッパを牽引するエコセンター(環境教育施設)となったものです。ユーモアあふれるディスプレイや教材、ワークショップなどを通じて環境問題を学べる仕組みが人気で、小中学校の修学旅行や大学の授業、企業の共同研究施設としても使われています。最近の一般利用者数は下降気味ですが、最盛期には年間10万人近い人が訪れており、英国のみならず世界中からボランティアが集まっています。敷地内の建物や施設はその土地で得られる資材で建てられ、化石燃料のバックアップを受けながらも9割近くの燃料を風力や太陽光などの自然エネルギーでまかかっています。

新しいエコビレッジへの期待と社会的意義

英国エコビレッジの多くが非合法に始まったヒッピーコミュニティ^{*2}だったのに対して、2005年に立ち上がった南ウェールズのラマス・プロジェクトは広く周囲の人々を巻き込みながら社会の主流に影響を与えようとしています。団体設立当初から地方自治体と協議を重ね、すべてのプロセスをホームページやパンフレットで公開し、地元説明会を開催したりして地域へのPRを精力的に行ってきました。その努力が実って、2009年秋、3度目の開発審議会で正式に認可があり、



北ウェールズ、カエマボンのゲストハウス。ワークショップで自力建設した

※1 オルタナティブ (alternative)
既存のものに取って代わる新しいもの。

※2 ヒッピーコミュニティ (hippie commune)
新しい価値観、生き方を模索した共同生活体。

建設が始まりました。計画は第1期居住者の9家族が中心になって策定されましたが、株主が150人、賛助会員がおよそ500人、サポーターの中には行政職員や専門家なども多くいます。

プロジェクトのねらいは、約30haの敷地内の自然環境を保全しながら、地域に文化的、経済的な貢献をもたらす暮らしとコミュニティを創ることです。エコロジカルな建築デザインだけでなく、一般市民向けに各種セミナーやワークショップを開催したり、交流スペースを提供したりするほか、エコロジカル・フットプリント^{※3}や自然環境（土壌・樹木）への影響や車の交通に関するアセスメント・レポートを公開しています。

保守的と言われるウェールズで、エコビレッジが行政のお墨つきを得て計画的にスタートしたことは注目に値します。英国では、90年代後半から起こった住宅投機ブームのおかげで風光明媚な地方町村は都市の富裕層の別荘として占拠され、住宅の価格が高騰したばかりか冬になるとゴースタウン化するという問題が起きました。また、日本と同様に、農村の人口減少に伴って学校が閉鎖されたり、隣町の大型スーパーマーケットが原因で商店が閉店したり、地方問題が深刻化しています。それに加え、英国は2050年までに80%の二酸化炭素削減を目標にしており、地球環境問題への取組みも真剣味を帯びてきています。

このような社会背景の中で、ラマス・プロジェクトはサステナブルな農村開発のモデルとして、環境負荷の少ない暮らしと地域の活性化を追求しようとしており、自治体だけでなく農業や建築、都市計画などの専門家の注目を集めています。

道内の持続可能な地域モデルとして

ヨーロッパのエコビレッジで私が最も心を打たれたことは、コミュニティの中には、たとえ子どもでも身体にハンディのある人でも役割があり、感謝し、感謝されるチャンスがあるということでした。「人が幸せに生きていくのに本当に必要なもの」は安心な食べ物

と住まい、そして仲間とのつながりの中で自分の価値を感じられることでしょう。

エコビレッジは、省資源・省エネルギーなど環境問題対策だけでなく、少子高齢化や治安などの社会問題にも対応した総合的な地域計画になりえます。とりわけ地方の町村においては、景観保全や農業振興、アグリツーリズムなどを含む地域活性を複合的に進める原動力となる可能性を持っています。

2008年帰国後、私はエコビレッジを支える循環型の暮らしの技術や、持続可能なまちづくりを北海道で学んだり広めたりしながら、ゆくゆくはモデルとなるビレッジを創りたいと考えました。そして09年春から現在の活動を始めたのです。

エコビレッジライフ体験塾で実践者を育てる

最初に取り組んだのは通年週末型の塾です。長沼町にある古民家と2反あまりの畑を教材に、エコビレッジライフをテーマにした食や住まい、経済、コミュニケーションなどを学ぶコースを開講しました。受講生の多くは都市に住むサラリーマンですが、塾を修了してから市民農園を借りて栽培を始めたり、仲間と一緒に味噌や保存食を作ったり、都市の生活の中でできることにトライし始めています。

何でもお金で手に入れていた暮らし、一方的に消費者として誰かに頼っていた都市生活に少しずつ手づくりを取り入れる、それまで一人でやっていたことを友達や隣人と一緒にやってみる。エコビレッジライフのエッセンスはそういうことです。実際にコミュニティに住まなくても、サラリーマンを辞めて田舎に移住しなくても、今いる場所、今あるものでできるエコビレッジライフを実践することが大切なのです。



手塩にかけはさがけて天日乾燥したお米は格別

※3 エコロジカル・フットプリント (Ecological footprint)
地球の環境容量を表す指標。人間活動が環境に与える負荷を資源の再生産および廃棄物の浄化に必要な面積として示した数値。

行政や専門家に任せきりの依存生活から脱却して自分の暮らしを自分でデザインする、自分たちのまちを自分たちで育てるという意識、そしてみんなができる範囲で小さなアクションを起こすこと。ささやかな取り組みがつながり重なり、日々の暮らしの中に笑顔ある風景が増えることで人やまちは変わっていくと思います。そのための最初の一步を促す役割、実践者を育て増やす活動を私たちはしています。

地域全体が持続可能型へトランジション（移行）

これからの時代は自分だけの理想を実現するための閉じたコミュニティではなく、拠点としてのエコビレッジと、より広がりある関係性の中で異なる分野やセクターの活動が連携し、地域全体が少しずつ変遷するトランジション運動^{※4}を並行していく必要があるでしょう。英国発のトランジション運動は、ピークオイルや気候変動など地球規模の環境問題に対応したまちづくり手法ですが、大量消費文化の中で分断されていた人と人、人とモノがつながり、顔の見える関係を取り戻す参加型の手法が人々を魅了して世界各地に拡大しています。「みんなの想像力を働かせ創造的に挑めば、石油のない未来は今よりいい未来になるだろう」と提唱者ロブ・ホプキンスは語っています。環境問題はどうしても我慢や後退という暗いイメージを抱かせがちですが、むしろ縮退のプロセスを人びとの創意工夫で楽しもうという前向きな姿勢と、どんな立場の人でも今すぐできることから、という気軽さが重要なポイントです。

余市町での新たな挑戦

2012年から私たちの活動舞台となっている余市町では、持続可能な暮らしとコミュニティのモデルとなるエコビレッジ構想を描きながら、多様な人が集い学ぶ場を創ろうとしています。まず、周辺の自然環境や歴史文化、一次産業など地域の魅力を発掘し、ネットワークするためにフットパスツアーを始めました。生産者と勉強会を行ったり、札幌や小樽からの参加者も一緒に笹刈りをしてパスを整備したりしています。農作業

体験や小さなファーマーズマーケットは参加者に大人気。直接的な体験や交流を通じて農村の魅力に触れる機会を作りながら、一方的なもてなしや消費するだけのレジャーではなく、互いに気づきを共有し支え合う関係を創りたいと思っています。

今年の秋には余市名産の果樹を使ったスイーツコンテストも開催されるでしょう。コンテストの形式はとっていますが、競争よりも出会いの機会を創ることが目的なので、選考の過程でも生産現場を知ってもらうツアーや、地域のよさを表現し合う交流会など工夫を凝らして準備をしているところです。

学びや交流、情報発信を促進するのがエコカレッジ計画です。カレッジの研修室やカフェのあるセンターハウスはエネルギー消費を抑え、環境負荷の少ない農的暮らしをデモンストレーションする場所として設計を進めています。そこを訪れた人が様々なアイデアや技を体験的に学び、家庭や地域で実践できるようなサポートをするとともに、災害発生時には地域住民の生活支援もできるような機能も盛り込んでいきたい。エコカレッジを拠点に、地域資源を活用した学びのプログラムを展開し、まち全体がトランジションすることを期待しています。

NPO法人北海道エコビレッジ推進プロジェクト
<http://ecovillage.greenwebs.net/>



余市町でのフットパスツアー

※4 トランジション運動

安い石油に依存した大量消費型の社会から、地域をベースにした持続可能な社会へ移行（transition）していこうという草の根運動。